第 54 回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会を開催して

院長　下瀬　省二

第 54 回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会を 2021 年 7 月 15 日(木)、16 日(金) に広島国際会議場で開催しました。本学術集会は、国内・外の整形外科医、病理医、放射線科医、腫瘍内科医、形成外科医などが、一堂に会し、骨・軟部腫瘍の診断・治療などについて討論する会です。骨・軟部腫瘍は特殊な領域で、一般整形外科医は診療に消極的な傾向があります。そこで、一般整形外科医が骨・軟部腫瘍の診療にもっと興味を持てるような具体的なテーマを考えることにしました。

近年、分子標的治療薬や免疫チェック阻害剤などの治療の登場により、がん患者の予後は改善してきています。化学療法における全身状態の評価として、performance status(PS)が用いられます。限られた自分の身のまわりのことしかできず、日中の 50%以上をベッドか椅子で過ごす PS3 の状態は、化学療法の適応になりません。変形性関節症、変形性脊椎症などの加齢性変化や骨転移などにより歩行機能が障害され、PS が低下すると、化学療法を受ける機会を失うことになります。がん患者が治療の機会を逃さないためには、多くの整形外科医が身近な領域としてがん診療に興味を持ち、運動機能の維持・向上に、積極的に関わる必要があると考え、テーマを「運動器の腫瘍とがんロコモの未来を築く」としました。

新型コロナウイルス感染症の流行の影響で、2020 年 3 月以降は、学会の現地開催は極めて困難で、オンライン配信のみで開催される状況が続いていました。しかし、幸いなことに、感染流行の狭間の時期がちょうど開催時期に一致し、緊急事態宣言が 2021 年 6 月 20 日に解除され、広島市の新規感染者数が 19 日間連続で一桁の状況が続いていたため、日本整形外科学会執行部と協議の上、演者・座長のみではなく、一般参加も可能な形で開催できました。

特別講演として、広島大学の越智光夫学長に「日本の大学における科学力の現状」、PMDA の藤原康弘理事長に「医療イノベーションの推進に向けた PMDA の取組み」をご講演いただきました。招待講演の Memorial Sloan Kettering Cancer Center の Dr. John H. Healey、Royal Marsden Hospital の Dr. Khin Thway、Kyung Hee University Hospital の Dr. Young-Soo Chun は、録音済スライドを会場で映写しました。

教育研修講演では、整形外科、放射線科、病理診断科、遺伝子診断科などの各領域の先生にがんロコモ、軟部腫瘍診療ガイドライン、放射線治療、陽子線・重粒子線治療、病理診断、ゲノム医療などの基礎から応用、現状と課題、将来展望についてお話しいただきました。

シンポジウムは、「がんロコモの現状と課題」「薬物療法の適応と限界」「処理骨移植の現状と課題」の 3 つのテーマとしました。特にがんロコモ、薬物療法のテーマに関しては、多くのご応募をいただきましたので、2 日間に分けて討論いただきました。主題は、「骨・軟部腫瘍の領域における先端技術の応用」「運動器の腫瘍の機能向上に向けた取り組み」「骨巨細胞腫に対する治療」「骨盤悪性腫瘍に対する治療」「再発腫瘍に対する集学的治療」「転移性骨腫瘍に対する治療」「化学療法の適応と限界」「小児の骨・軟部腫瘍に対する治療の現状と課題」など、未来の礎となるようなテーマとしました。一般演題から特に優秀な演題を 9 つ選出し、優秀演題として、現地で発表いただきました。

当初は 5 会場で開催予定でしたが、2021 年 3 月に大会場をキャンセルし、中規模の 4 会場で開催しました。一般口演、ポスターは現地での発表を行わないようにしていたため、密になることもなく、250 名の来場者がありました。会場には、ほぼ 1 年半ぶりに、骨・軟部腫瘍を診療している先生方の懐かしい顔ぶれがありました。会場だけでなく、フロアでお互いの近況を語りあいました。現地での直接顔を見ながらの質疑応答は、活気があり、白熱しました。北は北海道から、南は九州まで、多くの先生に久しぶりにお会いでき、現地開催できた喜びをあらためて噛み締めました。

学会 2 日目の午後には、国際オリンピック委員会（IOC）のバッハ会長が、平和記念公園を訪問され、会場周囲は交通規制となりました。学会はそのものには影響はありませんでしたが、お帰りの先生には少し影響があったかもしれません。

現地開催終了後に、オンデマンド配信を 8 月 4 日から 8 月 31 日まで行いました。一般演題は発表音声を録音したスライドデータ、ポスターは音声なしのスライドデータを予め登録いただき、配信しました。特別講演、招待講演、教育研修講演、スポンサードセミナー（一部配信なし）などは専門医単位の取得が可能であり、現地で聞くことができなかった演題の聴講ができるなど、オンデマンドならではのメリットもありました。お陰様で、有料参加者数は想定していた 1,180 名を超え、1,300 名に達しました。

新型コロナウイルス感染症という困難な状況の中、また、酷暑のなか、沢山の皆さまに参加していただき、無事盛会のうちに終了することができました。本学術集会の開催に際し、ご助言、ご協力いただきました日本整形外科学会学術集会運営委員会をはじめとする会員の皆さま、広島大学

整形外科学教室ならびに同門会の皆さま、また、ご協賛いただきました多くの企業の皆さまに、心よりお礼申し上げます。また、本学術集会の運営に携わっていただきました、広島大学整形外科関連施設の腫瘍グループのご尽力に感謝申し上げます。

広島大学整形外科　安永裕司同門会長、日本整形外科学会　原田昭副理事長、
広島大学整形外科関連施設腫瘍グループ、呉医療センター整形外科スタッフ